

公害経験継承論の射程

○清水万由子*
Mayuko Shimizu

1. 公害経験の社会的構築性

日本において公害が社会問題化した1960～70年代から半世紀余りが経過した今、公害被害者は存在し、新たな公害被害が発生しているにもかかわらず、公害は「終わった」過去のものとして捉える人は少なくないだろう。報告者らは公害を、現在を生きる人々が公害の経験を価値あるものとして未来に向けて記録／記憶し、語り継ぐ行為の意義と方法を論じてきた（清水ほか編, 2023）。これを仮に「公害経験継承論」とする場合、その射程はいかなるものか。これまでの研究成果をもとに、本報告では試論的に論じてみたい。

まず、公害経験継承論は、現代の日本で継承すべき公害経験は社会的に構築されるものであるという立場をとる。現代において公害経験を継承する主体は、かつてのような「公害の一般化」（宮本, 2014）を同時代的に体験していない人びと（非体験者）である。歴史家の成田龍一が、現代は「記憶」として戦争経験を継承する時代であるとした（成田, 2010=2020）ように、公害もまた非体験者がメディアや教育を通じた語りによって公害が生じている状況を追体験し、集合的な記憶として継承するという時代にある。したがって、公害経験継承は、過去の事実を記録に残すだけでなく、それに対して現在の視点から何らかの意味づけを行ないながら語り継ぐ行為となる。公害経験継承論において、「多視点性」を伴う「解釈」「学習」「対話」が鍵となる（清水ほか編, 2023）のは、公害が過去のものとなりつつある状況において、公害経験が持つ現代的意味は所与ではなく、社会的に構築されるものと考えからである。

2. 公害経験継承における加害—被害関係

現代における公害経験が社会的に構築されるものだとすれば、その構築プロセスは決定的に重要である。各地の公害被害者らは、自らの苦難の経験を風化させたくない、あるいは同じ苦しみを繰り返してほしくないという思いから、公害経験の継承を求めてきた。全国の公害資料館の多くは被害者の要求に自治体が応えて、あるいは被害者とその支援者によって設置されている。例えば新潟県立環境と人間のふれあい館は、1995年に締結された新潟水俣被害者の会・共闘会議と昭和電工との解決協定に基づいて、昭和電工が地域の再生・振興のために新潟県に2.5億円を寄付したことを受け、新潟県が2001年に開設した。他

* 龍谷大学政策学部 Faculty of Policy Science, Ryukoku University
〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町 67 E-mail: shimizu@policy.ryukoku.ac.jp

の公害事件においても、被害者側が求める「解決」の一つの要素として公害資料館建設や継承事業が位置付けられる場合には、継承活動は顕在的な被害者が中心となることが多い。

公害経験継承論は、特定の被害者の経験継承だけを対象とするものではなく、ましてや公害経験継承を、裁判における被害者勝訴や被害認定制度の改善などを目標とする「闘争」の手段とも捉えない。むしろ、「闘争」の文脈では捨象されがちであった、加害—被害関係では線引きできない多様な経験も含んだ公害経験を構築することが重要である。例えば、加害に関わる経験は語られることが少ないが、長い「闘争」において固定化された加害—被害関係とは異なる関係が蓄積されつつある（安藤・林・丹野，2021）。また、公害地域の住民は、環境破壊の顕在的／潜在的な被害者であると同時に、被害者を差別してきた広義の加害者でもあり、それは地域外からの差別的な眼差しが生み出したものでもあった。水俣の「もやい直し」は、そうした現実も含めた水俣病の経験を、プラスの価値をもつものと解釈して語り継ごうとするものだった（吉井，2016）。

3. 公害経験継承と環境政策研究

公害経験継承の実践を大別すると、公害資料のアーカイブズと、公害経験の学習という2つの領域がある。公害経験継承の実践が目指すのは、公害を起こさない社会をつくることであるが、両者がどのような関係で結びつくのかについては、十分に議論されているとは言えない。公害経験継承論はアーカイブズ学、教育学、社会学等の学際的アプローチをとる必要があるが、公害を起こさない社会への変革（transformation）を目指す環境政策研究との接合も重要な課題である。

公害あるいは公害と同根の問題は今日の社会にも存在する。過去から現在に続く多面的な公害経験を知ることで現代社会への洞察を磨き、公害を起こす社会構造を解き明かし、変革の推進力を高める活動として公害経験継承の実践を位置付けることができれば、公害経験継承論の環境政策及び環境政策研究への示唆はより明確になるであろう。

参考文献

- 安藤聡彦・林美帆・丹野春香編著（2021）『公害スタディーズ：悶え、哀しみ、闘い、語りつぐ』ころから
- 清水万由子・林美帆・除本理史編著（2023）『公害の経験を未来につなぐ：教育・フォーラム・アーカイブズを通じた公害資料館の挑戦』ナカニシヤ出版
- 成田龍一（2010=2020）『増補「戦争経験」の戦後史：語られた体験/証言/記憶』岩波書店
- 宮本憲一（2014）『戦後日本公害史論』岩波書店
- 吉井正澄（2016）『「じゃなかしゃば」新しい水俣』藤原書店